聖書における「埋葬」の意義と信仰：約束の地と相続への展望

父たちの墓 - 2018/08/03

KANNO Kazuhiko / NotebookLM 2026.2.14

要旨

本資料は、創世記から新約聖書（使徒行伝、ヘブル人への手紙）に至るまでの記述に基づき、聖書における「埋葬」と「墓」が持つ神学的な意義を分析したものである。

聖書、特に創世記の叙事詩において、族長たちの埋葬は単なる人生の終焉ではなく、神の「約束の地」に対する強固な信仰の表明として位置づけられている。ヨセフが臨終に際して自身の骨をエジプトから運び出すよう命じたことは、数百年後の成就を見据えた信仰の象徴であり、新約聖書の著者たちはこれを「復活」と「天の御国」の相続を待ち望む忍耐のモデルとして解釈している。埋葬地の選定は、将来的な相続人としての権利と、神による永遠の命の約束を確信する行為である。

---

1. 創世記の構造と埋葬の終止符

創世記の後半部分は、父・子・子らという三段階の歴史（トールドート）で構成されており、それぞれの物語は「埋葬」という行為によって締めくくられる。これは、信仰の継承と約束の地の所有を強調する重要な構造的特徴である。

歴史の三段階構造

- **テラの歴史（11章27節～）**：アブラハムとイサクの物語。アブラハムとサラの埋葬によって一段落する。
- **イサクの歴史（25章19節～）**：イサクとヤコブの物語。イサクの埋葬によって終わる。
- **ヤコブの歴史**: ヤコブの子らの物語。ヤコブの埋葬と、ヨセフの埋葬に関する指示で完結する。

埋葬の意味

埋葬は単なる死の記録ではなく、その人物が「どこに属しているか」を明確にする行為である。アブラハム、サラ、イサク、ヤコブは同じ場所に葬られており、これは契約の地に対する彼らの執着と信仰を示している。

---

2. ヨセフの遺言と約束の成就

ヨセフの死と埋葬に関する記述は、創世記の結びとヨシュア記の結びを繋ぐ重要な架け橋となっている。

ヨセフの信仰的指示

ヨセフは110歳でエジプトで死去する際、イスラエルの子らに「神は必ずあなた方を顧みてくださる。その時、私の遺体をここから携え上ってください」と誓わせた。彼は死後、ミイラとして保存されたが、その目的はエジプトでの永眠ではなく、約束の地への帰還であった。

ヨシュア記における成就

ヨセフの指示は、出エジプトを経てヨシュア記の最後で成就する。

- **ヨセフの骨の埋葬**: エジプトから携えられたヨセフの骨は、シェケムの地（ヤコブがハモルの子らから買い取った土地）に葬られた。
- **ヨシュアの死**: ヨシュアもヨセフと同じく110歳で死に、それぞれの相続地に葬られた。
- **相続地への埋葬**: 創世記の終わりとヨシュア記の終わりが「埋葬」で対応しており、神の約束が土地の割り当て（相続）という形で現実のものとなったことを示している。

---

3. 新約聖書における証言と解釈

新約聖書の諸著者は、旧約聖書の埋葬の記述を「救済史」の文脈で再解釈している。

使徒行伝（ステパノの証言）

使徒行伝7章において、ステパノは救いの歴史を語る中で、父たちの埋葬について触れている。

- **記述の混交**: ステパノの証言（16節）では、アブラハムがシェケムで墓を買ったという記述があり、創世記のヤコブによる購入記録と混ざっている可能性がある。しかし、本質的な重要性は、彼らが「相続地」に葬られたという事実にある。

ヘブル人への手紙（信仰の列伝）

ヘブル人への手紙11章22節では、ヨセフが臨終の際に「骨について指図したこと」が、彼の信仰の最大の功績の一つとして数えられている。

- **信仰のリスト**: 埋葬の指示が、アブラハムの供え物やモーセの決断と並んで「信仰によって」なされた重大な出来事として扱われている。
- **約束の先行取得**: 土地がまだ手に入っていない段階で墓を設けることは、将来の所有を確信する究極の信仰行為である。

---

4. 埋葬と相続：蘇りへの展望

埋葬の場所を「相続地」にこだわる理由は、それが将来の「復活」と「天の都」への入り口であると信じられていたからである。

概念	埋葬・墓との関連
相続地	相続人として、神から与えられる正当な土地に留まる権利。
蘇り（復…	墓は復活を待つ場所であり、共に住むことを待機する場所。
天の都	地上の相続地は、本来の目的地である「天の御国」の型である。
忍耐	約束が成就するまで数百年、数千年待つために必要な資質。

信仰の二段階

ヘブル人への手紙によれば、信仰の先祖たちは以下の二つの側面を待ち望んでいた。

1. **物理的な相続地**: カナンの地への定住。
2. **霊的な相続地**: 復活を通して与えられる天の都（永遠の命）。

彼らが丁寧に葬られることを望んだのは、神の永遠の命が与えられた「相続人」として復活することを信じていたためである。

---

5. 結論：契約の箱としての墓

埋葬地をどこにするかという問題が創世記で重大視されている理由は、それが「神の命令を守り、約束を待つ」という姿勢の象徴だからである。

墓は、いわば「契約の箱」のような役割を果たしている。死してなお、その骨が約束の地にあることは、神の御心が完全に行われ、約束されたものが必ず手に入ることへの信頼の表明である。現代の信仰者にとっても、この「忍耐」を持って約束を待ち望む姿勢は、恐れ退いて滅びるのではなく、信じて命を保つための不可欠な使命として提示されている。遅くなることはあっても、神の約束は必ず実現するという確信が、父たちの墓には込められている。